

ケインズによるミル・ジェヴォンズ・マーシャルの検討

—— 経済学者の役割に関する一考察 ——

阿部秀二郎

はじめに

ケインズが『人物評伝』の初版（1933年）で取り上げた経済学者は、次である。

ロバート・マルサス、アルフレッド・マーシャル、F.Y. エッジワース、F.P. ラムゼー

ケインズによれば、取り上げる人物に関する評伝は直接の面識に基づき、「じかの印象を受けて執筆された」（Keynes [2013X] p.xix 訳 iii 頁）。その例外として挙げられているのが、マルサスである。さらにケインズの死後の1951年には、ジェフリー・ケインズによって、ジェヴォンズに関するエッセイが取り上げられた¹⁾。

ケインズがじかの印象を受けていない経済学者は、当然マルサスとジェヴォンズ以外にも多く存在する。著名な経済学者としては、リカードや J.S. ミルの名が真っ先に挙げられるが、彼らは取り上げられていない。本論文ではケインズはなぜミルを評伝に描かなかったのかを探索することから論を起こしたい。

この問題の背景をもう少し説明しよう。

ケインズはこの評伝がある試みに基づいていると指摘している。それはロックの『人間悟性論』以降の、イギリスの上流知識階級の連繋と歴史的連続性を明らかにしようとしていることである。このイギリスの知識階級の連繋をケインズは次のようにパラフレーズしていると指摘することもできるであろう。

「…この伝統こそ、ロック、ヒューム、アダム・スミス、ベイリー、ベンサム、ダーウィ
ン、およびミルの名前によって連想させられるものであり、真理への愛ときわめて高邁な
清澄さにより、感傷ないしは形而上学的思弁にとらわれない散文的健全性により、また
この上ない公平無視と公共心とによって特色づけられている伝統なのである。」

（Keynes [1933] p.86 訳 91 頁）

このように、ケインズはマルサス、マーシャルを上流知識階級の伝統を有する者として取り上げており、その伝統にミルが存在していると指摘できる。

1) ほかに、ニュートンとメアリー・ベイリー、マーシャルであった。

直接面識がないことが原因であれば、マルサスが取り上げられるべきではない。逆にいえばマルサスを取り上げるのであれば、上流知識階級の連続性という面で考えた場合に、ミルを取り上げるべきであるともいえる。

このようにミルを取り上げない理由を考察する場合にポイントになるのが、マルサスを取り上げた理由である。ウィンチは、『一般理論』に包摂される新たな経済思想の先駆者としてマルサスが取り上げられたとしている（Winch [2013] p.xxii）。

ウィンチが正しければ、『人物評伝』にはイギリス上流知識階級の伝統を、『一般理論』という当時の異端としてのケインズの経済思想に近づけるべくケインズの意図も含んで書かれたということになる。

『一般理論』において、自らの経済学を展開するケインズにとり、ピグー以前の経済学は古典派経済学であり、当然、ミル、マーシャルもその流れに位置する存在であった。だとすれば、『人物評伝』において、マーシャルが取り上げられることも興味深い。

本論文では、ケインズの『人物評伝』を中心として、ミル、ジェヴォンズ、マーシャルがどのように論じられていたのかを分析することで、ケインズが経済学者として何を評価していたのかを明確にする。最後にウィンチの分析に対する評価を試みる。さらにケインズの評価から、現在の経済学者においても重要であると考えられるエッセンスを抽出する。

これらの目的に基づき、構成は次のようになる。

第1章では、『人物評伝』、『一般理論』を中心に利用して、ミルに対するケインズの評価を分析する。

第2章では、『人物評伝』に基づきジェヴォンズに対するケインズの評価を分析する。

第3章では、同様にマーシャルに対するケインズの評価を分析する。

最後に、上の課題への回答をまとめる。

第1章 ケインズによるミルの分析

ケインズのミルの人となりに関する叙述は多いとは言えない。その中から拾い上げてミルに対するケインズの評価を分析していく。

フォックスウェルの評伝の中で、フォックスウェルの早熟さがミルの早熟さと関連付けて指摘されている（Keynes [2013X] p.274）。同様にミルに対するケインズの高い評価として、マーシャルとの比較において、遂行力や集中力の高さが指摘されている。

「マーシャルの『原理』に比較して、この有名な書物の起稿はなんとという相違であろう！ミルの『原理』は1845年秋に着手され、1847年末までには出版の用意がととのっていた。この2年ばかりのあいだにも、ミルが…（多いときには1週に5回も）アイルランドの農

民問題にかんする論説を執筆していた…。」

(Keynes [1951] p.180 訳 201 頁)

「迅速な遂行力と持続的な集中力 (J.S. ミルがもっていたような) を欠き…」

(Keynes [1951] p.197 訳 161 頁)

リカードウ社会主義者との関連で、ケインズはミルが彼らに注意を払っていなかったことについて、フォックスウェルに語らせている。

「ミルはしばしば最初のころの会合に出席した。恐らく父を通してホジスキンを、ベンサムを通してトンプソンを知っていたと思うが…実際には根源的なあるいは深い認識を得ていたようには思われない。」

(Keynes [2013X] p.280)

このようにミルについて、ケインズはフォックスウェルに語らせているほか、バジヨットのミル評価も紹介している。表面的には当時の3大経済学者として、スミス、リカードウ、ミルを挙げるものの、ミルに対しては「著作に独創的なものはない。」と評していたとケインズは紹介した。さらに、バジヨットはミルの専制への批判も行い、それはマーシャルに対しても同様のものであったとした (Keynes [2013XI] p.540)。

次に、1920年の『確率論』におけるケインズのミルに対する評価を拾い上げてみる。

ケインズは序文で、自身の確率論がケンブリッジのジョンソン、ムーア、バートランド・ラッセルの直接的影響を受けており、彼らの議論が大陸の科学者たちの影響を受けながらも、ロック、パークレー、ヒューム、ミル、シジウィックといった事実問題を扱うイギリスの伝統に存在することを指摘することで、自らの位置もイギリスの伝統に根付いていることを指摘している (Keynes [2013VIII] Preface)。

そしてケインズは、「帰納と類推」という経験科学における法則の重要性を説明する中で、「帰納に関する歴史に関する注」を付けている。この帰納の問題はバイコン以来のイギリスの伝統において議論されてきた問題であり、重要な問題でもあるのにもかかわらずケインズの時代においても創造的な議論がなされていないとケインズに認識された (Keynes [2013VIII] p.295)。

そのケインズ認識の背後には、ケインズの帰納問題に関するミルの存在がある。ケインズによるとミルの帰納論は、方法論などは異なっているにせよ、バイコンと同一の問題を扱っていたのである。

「経験的な議論には類推がもたらす最初の確率が必要であり、最初の確率は純粋な帰納または事例の乗法（multiplication of instance）によって確実性に向かって引き上げられる。こうして類推に依存し、類推がもたらす最初の確率が高いほど、多くの事例を必要としなくて済むのである。…ベイコンの論理学史上における偉大な到達点は、科学的な議論における方法的類推の重要性に関して認識したことであり…ベイコンは純粋な帰納の重要性を軽く見た事である。…ここで展開した内容はほとんどミルにも適合する。ミルは科学的な研究における純粋な帰納の役割を低評価したし、体系的な考察者にとっての類推を強調した。」

(Keynes [2013VIII] p.298)

したがってケインズにとってミルはベイコンとともに、評価されるべき存在であったが、一方で、ミルはベイコン同様にミスが多く当時多くの批判にさらされることになったのである。この文脈ではケインズはミルの貢献を正当に評価するべきであると解釈できるのであるが、また、次のように科学の前進にとっての論理学研究の意義を明確に認識しているベイコンと比較して、ミルは禁欲的かつ抑制的に自身の研究の意義を認識しているとケインズは評している。

「科学の進展がベイコン自身の目的であって、思想がそれをもたらすと信じたが、ミルはそうではなかった。…ミルは「科学的な探求において正確な思想家が従うだろう行動を分類化し一般化する」こと以外には目的はなかった。ベイコンは…未知のルールや例示を提供したのに対して、ミルは「科学を開拓する既存の状態において、真理の考察の理論において革命を成し遂げるとか、その行為に根源的な新たな過程を加えると考える人に対する強力な presumption がある」とした。」

(Keynes [2013VIII] p.296)

次に、1936年の『一般理論』におけるケインズのミルに対する理解を提示する。

まず、ミルはケインズにとっての「古典派」に含まれる存在であり、「古典派」はフランス語版序文にあるセイの「販路法則」（Keynes [2013VII] p.xxiv 訳 xxxix 頁）という誤謬に支配されている。そしてミルがその「販路法則」の信者であることを『経済学原理』を引用して証明している（Keynes [2013VII] p.18 訳 19 頁）。

さらに、ケインズはマーシャルの『国内価値の純粹理論』の一部を引用し、貯蓄投資一致という学説の、またピグーの著作で踏襲している貨幣経済と実体経済との乖離と、それゆえに「実物」理論を分析するという方法論の、前提としてミルの学説が存在していると指摘する。

「…学説は今日では決してこのような粗雑な形では述べられていないのである。それにもかかわらず、それは依然として古典派理論全体の基礎をなしており、…ミルに同意するこ

とには躊躇するかもしれない現代の経済学者たちも、ミルの学説を前提としなければならぬ結論を容認することには躊躇しないのである。」

(Keynes [2013VII] p.19 訳 20 頁)

最後に、ケインズがヘクシャーの『重商主義』を利用して、重商主義思想の自由放任主義との相対的な優位性を主張した「第 23 章 重商主義とその他に関する覚書」でミルが登場する。

まず、ケインズがヘクシャーから学んだ重商主義思想の特徴を 4 点挙げる。

- (1) 自由放任で利子が適切な水準に決まるのではなく、貨幣量と利子率との因果関係について、したがって国内の金融政策と利子率との関係について認識を有していた。中には流動性選好の認識を有する者もいたし、貨幣量と富の増加に関する関係を認識しているものもいた。
- (2) 自由放任が自動調節機能を有するわけではなく、安価な販売（トレード）や過度の競争が条件を一国に対して不利にすることを認識していた。
- (3) 「『財貨〔への過剰〕への恐怖』と貨幣の希少とを失業の原因と考えた。」(Keynes [2013VIII] p.346 訳 346 頁)
- (4) 重商主義思想は国民主義的であり、戦争を誘発する傾向について幻想を有してはいなかった。

そしてケインズは、上の議論は利子率を高めることで投資誘因との関係から指摘されていたとしているが、最終節にいたり、重商主義者にとっては「副次的な側面」(Keynes [2013VIII] p.358 訳 359 頁)ではあったが、過少消費について指摘している重商主義者が存在したことをヘクシャーから学んでいる。

マンドヴィルの『蜂の寓話』が当時の重商主義者に影響を与えることはあったもの²⁾の、その後古典派の議論からは抹殺されることになり、マルサスの有効需要理論で再び議論されることになったとケインズは指摘する。

しかし、マルサスの議論はリカードウからは無視されることになった。さらにミルの「賃金基金説」における「商品に対する需要は労働に対する需要ではない」という資本の第 4 命題は、論争を呼んだが、命題が否定され、否定された命題から新たな議論が展開される機会はなかったのである。

2) この文脈において、ケインズはマンドヴィルの『蜂の寓話』に対する 1876 年のレズリー・ステイーブンの批判を次のように紹介している。

「『マンドヴィルによって有名となった謬説』を完全に論破する手がかりは、商品に対する需要は労働に対する需要ではないという教義の中にある…」

(Keynes [2013VIII] p.358 訳 359 頁)

つまり、命題は否定されると、「商品に対する需要は労働に対する需要である」ということになる。したがって「商品に対する需要不足は労働に対する需要不足をもたらす」。このことから失業の原因は需要不足である、という議論である。

ケインズによれば、ミルの命題はマルサスを否定するうえで重要であったが、上の命題を拒否するミルの後継者たちにより、ミルのマルサス有効需要批判という事実は無視されてしまった。

ミルに対するケインズの『一般理論』における分析をこれらの点について考察すると、ケインズは古典派の代表としてのミル自身を批判しているというよりも、ミルの学説の継承者またはミル以後の経済学者がことの重要性に気づかないまたは影響力を行使することで、事実への認識を有することができなかったことを問題視していると考えることができる。

第2章 ケインズによるジェヴォンズの分析

ケインズがジェヴォンズを高く評価していることは周知である³⁾。そして『人物評伝』におけるケインズの経済学者としてのジェヴォンズ評価は、帰納的研究と演繹的研究の両方を利用しているという方法論に関するものがまず挙げられる。

(ア) 帰納的研究

その中でも帰納的研究が最初に取り上げられている。この研究に対してケインズは二つの題材から帰納的研究に関するジェヴォンズに対してのマイナスとプラスの評価を与えている。マイナスの評価として『石炭問題』が挙げられる。ケインズの分析によれば、『石炭問題』は帰納的方法や統計的手法に問題があるのではなく、ジェヴォンズの性向にその問題の原因を求めることができるということであった。具体的に言えば、ジェヴォンズの「退蔵本能、資源の枯渇という考え方に驚きあわてて興奮しやすい性格」(Keynes [2013X] p.117 訳 265 頁)のために、ジェヴォンズは自身の結論を世の中に知らしめ、社会的困難からの回避を図ることに貢献する方向に議論を方向付けてしまうことで「世間騒がせ」になったということになる。

プラスの評価として『金価値の重大な下落』から『太陽黒点説』までの帰納的研究が挙げられる。この中でも前者に対しては、次のような高い評価が与えられている。

「ジェヴォンズは物価指数の問題を事実上第1歩から解決しなければならなかった…この短いパンフレットにおいて、彼以後の著者を全部あわせたものに劣らないほどの進歩を成し遂げたといっても、恐らく過言ではない。」

(Keynes [2013X] p.119 訳 268 頁)

3) 井上 [1987] p.70, Peart [1996] p.174, Maas [2005] p.3 など

そしてこのケインズの評価は、『人物評伝』には直接言及はないが、フィッシャーによる『指数の作成』における次のようなジェヴォンズの高い評価と共通している。

「1863年に、イギリスのジェヴォンズは公式 21, 単純幾何を利用し, 1865年には、イギリスの物価を 1782 年までさかのぼって指数を導き出した。ジェヴォンズの主たる関心は, 1849 年に始まる金鉱山の出現による「金価値の下落」を示すことにあった。ジェヴォンズはスクロープによる表式価値基準 (tabular standard of value) を肯定しかつ強く支持した。ジェヴォンズはこの課題について注目を呼び起こしたことから、指数の父とみなしてよいかもしれない。」

(Fisher [1922] p.459)

さらに、ケインズは『金価値の重大な下落』ほどではないにしても、またその帰納的方法には何らかの問題があるにしても、一連の帰納的研究の役割に光を与えたことを高く評価する。

「こういう方法を用いることによって、ジェヴォンズは経済学を先見的な ^{モラル・サイエンス}道徳学から、確固たる経験の基礎の上に築かれた自然科学の方向へ大幅におし進めたのである。」

(Keynes [2013X] p.127 訳 276 頁)

(イ) 演繹的経済学

また、ケインズはジェヴォンズの演繹的経済学者の独創性を高く評価している。このケインズのジェヴォンズに対する高評価はジェヴォンズが 1862 年という早い段階における『経済学の数学的一般理論の考察』に対して与えられるものであった。その当時のワルラスやマーシャルが活躍する以前に、ジェヴォンズは演繹的・数学的経済学を展開していたことが評価されたのである。マーシャルに対するケインズの分析と好対照である。有名な引用であるが、再掲しておくことにしよう。

「1871 年には、1862 年においてのようには、もはや比類のない独創性を持つものではなかった。…にもかかわらず、…経済学に関する最初の近代的な書物として、それは新たにこの学科に取組もうとしているすべての聡明な人たち以上に魅了のあるものとなった。…マーシャルが真綿でくるむような言い方をしたのにたいして、それは石に刻んだように輪郭が鮮明であった。」

(Keynes [2013X] p.131 訳 280 頁)

帰納的研究に対するケインズの評価と比較すると、演繹的経済学に対する評価は相対的に下

がることになる。このケインズの評価はその時代における絶対主義的評価でもあり、かつ相対主義的評価と指摘することができるであろう。統計学を利用した帰納的方法に基づく法則発見への貢献という点での評価は当時における経済学的発展からの評価ということになる。一方の演繹的経済学においては、数学を利用したうえで、その主張が、マーシャル部分均衡理論への橋渡しとなったという面で評価はされているものの、一般均衡論へのインプリケーションであることなどは後に示すように多くは評価されていない面で絶対主義的評価と指摘するのは苦しい⁴⁾。一方で、方法以外の面において、需要・供給において価格が因果論的に決定するという文脈では古典派経済学にもその示唆は存在したことから、ミルの影響を払しょくできずにジェヴォンズが経済学を展開したという点において相対主義的な評価を与えていると指摘できる。

(ウ) その他の評価

統計的手法を利用した帰納的研究の先駆性、演繹的経済学の独創性を評価する以外にもケインズは次の2点において、ジェヴォンズを評価する。

まず、ジェヴォンズの資本理論である。ケインズによれば、古典派の賃金基金説は払しょくできなかったのだが、資本量と時間という2次元で資本を考慮することにより、資本の供給としての、機会費用概念を、また資本の需要としての、限界効率表を示唆するところまでジェヴォンズは進むことができたというものである⁵⁾。

次に、ジェヴォンズの歴史的研究である。この歴史的研究は帰納的研究と相補的な関係に位置付けることができるかもしれない。ジェヴォンズが『金価値の重大な下落』から『太陽黒点説』へと研究の幅を広げ、かつ指数を求めていく段階において、当時の物価史に関する研究を

4) スティグララーの『生産と分配の理論』が出版されるのが、1941年であり、『人物評伝』の新版は1951年であることから、ケインズは価値論のみならず生産・分配論における限界生産力説の理論的意義、そしてジェヴォンズの限界についても指摘し得たであろうが、むしろケインズが紹介しているのは、ジェヴォンズの第2版で追加された、価値の因果論的決定論であった(阿部 [1998])。この原因として次が挙げられる。一つ目はジェヴォンズに関するエッセイは1936年にすでに公表されていたものであること、二つ目はやはり1836年にマンチェスター統計協会で公表されたロビンズの「経済史思想史におけるジェヴォンズの立場」を通して、自らの理解の深度を深めたものと思われる。

5) ケインズはオーストリア学派の先鞭をつけたという理由でジェヴォンズが1936年当時に評価されるようになったとも記している。この評価を与えたのがロビンズであると考えられる。ロビンズは論文で、次のように論じている。

「全ての説明方法〈『理論』やエッジワースへの書簡〉で不完全であり不正確であるが、中心にあるのはこの公式 $\langle \frac{F^t}{F_t} \rangle$ である。この利子率に関する公式は、極端に狭い仮定に基づいているけれども、正しい。そしてヴィクセルと実質的に同じである」

(Robbins [1936] p.180)

クラウスによれば、ジェヴォンズの評価としてタウシグ、カッセル、そしてバーム・バヴェルクが挙げられており、バヴェルクとジェヴォンズの資本論が実質的に相当な乖離を有していた(Klaus [2001])。

様々な地域にまで、かつさらに長期的に拡大していくことを通して、その理論上の成果を確認しようとしたことを通して、(理論家というよりも)経済史家でもあったとケインズは評価するのである。

しかし、ケインズはジェヴォンズが理論へと結実させる目的に基づき歴史的研究を蓄積しただけではなく、歴史・過去そのものへの興味・愛着をジェヴォンズが抱いていたと指摘している。カンティロンの発掘や名の知られていない経済学者の文献を収集してそれらに光を与えるというジェヴォンズの経済学史家としての評価の背景にジェヴォンズのコレクターとしての資質が存在したと把握されている⁶⁾。

第3章 ケインズによるマーシャルの分析

ケインズのマーシャル評として、第1章で取り上げたミル、および第2章で取り上げたジェヴォンズとの対比から分析を展開する。

(ア) ミルとの対比

まずは、ミルとの対比またはミルとの関連から見ていくことにしよう。

マーシャルの幼少期とミルの幼少期における父親からの影響に関して、ケインズは類似性を見ている。ミルが父親に幼少期から英才教育を施されたのと同様に、マーシャルも小さいころから父親と深夜まで語学に励み、精神的に疲労していたことが指摘されている。

「愛情と厳格さのいり混じっていた点では、彼の父はジェームズ・ミルを思い出させる。…アルフレッドは父のために甚だしい過労に陥っていたので、自分でいつも言っていたように、彼の生活は伯母のルイザによって救われた」

(Keynes [2013X] p.162 訳 124 頁)

次に、第1章で指摘した資質について、ケインズはミルの名を挙げてはいないが次のように、ミルとの対比でマーシャルを評している。

「短時間のつよい集中力が、継続的な集中力の欠如とともに、生涯をつうじて彼の特徴をなしていた。彼は最高調の状態でなにかまとまった仕事をなしとげることが、めったにできなかった。」

(Keynes [2013X] pp.165-6 訳 127 頁)

6) ケインズは、さらに論理学での貢献にも言及しているが、この部分は他の部分と比して大きなものではない。さらに国家の経済活動への介入に関する議論についても触れていて、ジェヴォンズの後半期の活動であるとしている。

このように、幼児期の教育環境におけるミルとの類似性と、資質におけるミルとの相違性を有したマーシャルが経済学への入口で薫陶を受けたのがミルの『経済学原理』であった。マーシャルがミルの原理へと至る過程についてケインズは次のようにまとめている。

1860年代にイギリスにおいて展開されたハミルトン、マンセルの形而上学をめぐる議論にマーシャルが興味を持ったことが出発点であった。ミルが『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』において、スコットランド哲学のハミルトンを批判したのに対して、マンセルがハミルトンを擁護し、ミルに応報する論争が展開される中で、マーシャルも形而上学・哲学へと入っていくことになったのである⁷⁾。

さらにハミルトン、マンセルとミルや理神論者との論争は、ハーバード・スペンサーの『第一原理』で進化論と結びつけられ、さらに力を持ち始めていた功利主義もある中で、倫理問題が注目を浴びようになっていた。このような状況の中でマーシャルは形而上学から倫理学へと歩みを進めたとケインズは指摘する。ケインズによると、マーシャルはさらに倫理学研究における問題を感じ、経済学へと至ることになる。

この問題とは、マーシャルの言葉によると、すでに社会の現状に問題があるとは認識していたが、その問題の所在又は原因に関して適切に理解し、対応できるという自信が持てないとマーシャルが認識したことにある。そしてその理解、対応のためには経済学の研究が必要であるということになる。マーシャルはミルの『経済学原理』を読み、刺激を受けたが、物質的安楽の不平等ではなく、機会の不平等が問題解決として適切なものかどうか疑わしいと考えるようになったというのがマーシャルの言葉も引用したうえでのケインズの説明である。

しかし倫理学研究から経済学へという一足飛びの変化に関する説明として十分ではない。既述したように、「すでに社会の現状に問題がある」とマーシャルが認識しており、その問題は富者と貧困者との格差の存在または貧困者の存在であると指摘できる。そしてこのことが問題視されるのは倫理的発露からであると指摘できる。しかしミルの『経済学原理』において機会の不平等解消に対してマーシャルが疑念を抱くためには、マーシャルの心理学研究の説明が必要だろう。ケインズは次のようにもマーシャルが倫理学から経済学研究へと進んだ経緯について説明している。

「人間の才能のより高度な、より速かな発達の可能性に対する心理学の魅惑的な研究は、私を次のような問題と接触させるにいたった。すなわち、イギリス(ならびに他の諸国)の労働者階級の生活状態は一般に、どの程度まで充実した生活にとって十分なものであろうか。」

(Keynes [2013X] p.171 訳 134 頁)

7) ハミルトン、マンセルとミルとの関係について、大久保 [2013] 参照。大久保 [2013] は、ハミルトンのスコットランド哲学そしてドイツ観念論に対する、ミルのイギリス経験論の立場について解説している。

心理学研究を通して、労働者階級の生活状態の十分条件という問題を抱かせることになったのであり、その生活条件が不十分ではないことから労働者階級が進歩し、自らの才能を開花させるための勉強の余裕や機会がないのではないかという問題へと研究を進めることになったということになる⁸⁾。

そしてミルの『経済学原理』において、大きな刺激を受けつつも、ミルが求める機会の平等では十分な解法には至らないのではないかという問題関心をマーシャルが抱いたということになる。

(イ) ジェヴォンズとの対比

次に、ジェヴォンズとの対比である。

まず、次の有名な表現が示すように、マーシャルの研究成果を公表するうえでの慎重さ（遅さ）が指摘されている。

「ジェヴォンズの『経済学理論』はすばらしくはあるが急いで仕上げた、不正確で不完全な小冊子^{ブローシュア}であって、マーシャルの苦心をこらした、完璧な、極度に良心的な、極度に目立たないやり方とは雲泥の相違がある。…ジェヴォンズは釜が湧くのを見て子供のような喜びの叫びをあげた。マーシャルも釜が湧くを見たが、黙って座りこんでエンジンを作っただのである。」

(Keynes [2013X] p.184 訳 148 頁)

このケインズの評価は、ジェヴォンズとの対比でマーシャルを肯定的に評価する文脈で利用されている。マーシャルにとって数学は、経済的な真理へと至る過程において必要な用具ではあるが、その用具の価値を高く評価しすぎることによって、間違った研究方法になってしまうのであった。そしてケインズはこのマーシャルの考え方に肯定的であることは彼の『一般理論』を見ても理解できることである。

一方で、マーシャルが研究成果をなかなか出さない理由は、数学的方法による説明への忌避ということよりも、マーシャルの拘りにあるとケインズは分析している。

「マーシャルが初期の考察結果を公表しただけでなかったのは主に、次の二つに由来している。まず、その研究が最高に、そして最も有益な展開を見せるための本当の性質を得るた

8) 西沢 [2008] では、グローネヴェーゲンを引用しながら、カントを経由して経済学の研究へと進んだと指摘している。また松山 [2010] では、心理学では外的環境に内在する法則性や作用因が分析できないことも経済学研究へとマーシャルが進んだ理由であると分析している。

めに洞察が深いこと、さらに彼が世界に提示するものが彼自身の理想に届かないことを不本意とすること。」

(Keynes [2013X] p.188)

ケインズはこのマーシャルの拘りに対して、良い面と悪い面を指摘する。

良い面とは、経済学が対象とする経済主体に対する分析の広がり的重要性を指摘していることである。つまり、経済学が対象とする人間存在が、社会からの影響により変化するものであり、社会変化が急激であるから主体も急速に変化するのに対して、古典派経済学では人間存在を「不変量」として扱い、変化することについての分析を行っていないとした。そして人間存在の変化を考慮しなければならなくなる場合、人間存在を変化させる要因に関する分析も必要になる。それらの研究対象はしかしながら、当時潤沢に存在しているわけではない。

また、良い面としてマーシャルの個人的資質も挙げられている。マーシャル自身が正確を期す、簡潔な表現を求めるのに注意するなどの特徴を有していた。このことはマーシャルが大学で教師として働く場合にも負担になるのであり、これらのために成果が遅れがちになってしまうのであった。

そしてこの良い面と表裏の関係として悪い面が指摘される。

ケインズによれば、マーシャルが指摘していた経済主体と経済社会との循環的作用反作用との関係を追求する方法に基づくとして、また急速に経済社会が変化しているという前提に基づくのであれば、マーシャルが経済学者としてなすべきことは、体系書の出版ではなく、『外国貿易論』や『貨幣論』などといった小論文（モノグラフ）を、時機を逸することなく早く世の中に出版すべきであったのに、そうはしなかったことであった。

そうはしないことがなぜ悪いのかについて、やはりジェヴォンズとの比較において、ケインズは説明する。

ジェヴォンズは自らの発想が不完全であつてもそれを世の中にバラまいた。様々な問題があるのにもかかわらず早く世に問うというスタイルは拙速であると批判されるものであったが、ケインズによれば、だからこそ「偉大な個人的地位と他の人を刺戟する並びない力」(Keynes [2013X] p.198 訳 162 頁) をジェヴォンズに与えたのであった。さらに父であるネヴィル・ケインズによるマーシャル評価に基づき、マーシャルが自分の短所と長所に気づき、マーシャルの野心によって妨害されなければ、マーシャルの才能によって経済学ははるかに速く進歩を遂げていたに違いないとケインズは指摘した。

第4章 結び

ミル、ジェヴォンズ、マーシャルに対するケインズの評価を分析してきた。

まず、ミルについては、論理学における帰納法に評価を与えていた点で評価できるものの、バイコン同様にミスも存在するとしている。さらに経済学においては、のちのマーシャルなどにも影響を与えているものの、一方で、マルサス有効需要論が否定され、かつその後その議論が再度浮上しなかった点で、ミルの悪影響がその後の経済学者を支配したということになる。

次に、ジェヴォンズについては、その分析を行う方法における多様性が評価されている。その中でも特に帰納法が評価されている。さらに、ジェヴォンズは独創性に富む経済学者であり、有名な演繹的方法による結論以外にも、歴史的研究を用いた太陽黒点説などが評価されるものであった。

最後に、マーシャルについては、ミルとジェヴォンズとの対比が『人物評伝』では特に示唆的である。

まずミルとの対比において、マーシャルは研究者として業績を残す際に難点を有していると分析された。マーシャル経済学の出発点が、ミルとマンセルとの論争という時代状況を踏まえた倫理学の研究を起点として、その後心理学研究を経て、ミル経済学の分析にあった。さらにミル経済学への問題提起がさらに経済学への分析を進めることになるのであった。

次に、ジェヴォンズとの対比において、マーシャルの資質である正確さ・慎重さが明確にされた。さらに、ケインズはマーシャルがその時代背景において、急速な社会的変化が経済主体に与える影響を当時の経済学が分析できていないことを指摘したことを評価している。一方で、そうであればこそ経済学の体系化を俟つことはせずに、時機に応じて迅速に成果を公表するべきであったとケインズは指摘した。

これらの分析から最初に提示した問題への回答を準備する。

まず、『人物評伝』全体ではなく、ジェヴォンズ、マーシャルの評伝を分析する限り、ケインズ自身が『人物評伝』で伝えようとしている、イギリスの知的上流階級の連携以上の内容を提示してくれる。その内容の一つは『一般理論』と『人物評伝』との関係である。

ミル自身よりもミル以降の経済学者の、つまり古典派経済学者がマルサスの有効需要論を展開せなかったとケインズは指摘していることから、『一般理論』への系譜からマルサスを『人物評伝』では取り上げたとするウィンチの分析は妥当であると判断する。この指摘以外にも次のことをその根拠に提示することができるだろう。

ケインズがジェヴォンズを評価した資本理論において、ケインズの投資理論へとつながることが指摘されている。またマーシャルがもっと早くに出版するべきであった才能あふれる本としてケインズが指摘する『貨幣論』で、ケインズは貨幣需要としての保有動機分析が指摘されていたり、購買力平価説、割引率の役割などを挙げている。

そして次に指摘する点は、『一般理論』への系譜として直接提示する根拠としては弱い、ケインズ自身の経済学者として有すべき資質または役割を考慮することで、間接的な証拠と言えるものかもしれない。

ジェヴォンズとの比較においてマーシャルに欠落していた小論文（モノグラフ）の公表の必要性である。

ケインズは経済学者が出版するものとして、小論文以外に「体系書」とがあると指摘する。「体系書」はスミスの『国富論』、マルサスの『経済学原理』、ミルの『経済学原理』、マーシャルの『経済学原理』などである。この「体系書」についてケインズは次のような役割を与えている。

「経済学の体系書には大きな教育上の価値があるかもしれない。われわれは主要作品として、^{ビエール・ド・レジスタンス}〈主要作品〉として、各世代ごとに一冊の体系書を必要とするであろう。」

(Keynes [2013X] p.198 訳 161-2 頁⁹⁾)

しかしこの「体系書」としてケインズが評価しているのはスミスの『国富論』だけである。マルサスの『経済学原理』は、パンフレットとして意味であった人口論を包摂することで、その人口論の輝きを失ってしまったと評し、ミルの『経済学原理』は支配的影響力を有することになり、その後の経済学者の展開を妨害したと評する。

それらに対して、ケインズ自身多くの小論文を、時機を見て出版してきた。『一般理論』すらもそのような存在であると考えられるだろう。次の表現に社会的インパクトを与える目的として、その対象を敢えて経済学者に選んでいると指摘されており、間違いなく社会的論争を呼び起こすためのパンフレットの役割をケインズは与えている。

「本書は主として、私の仲間である経済学者たちに向けて書かれたものである。…論争的となっている問題は、どんなに誇張しても誇張しすぎることはないほどの重要性を持っている。しかし、もし私の説明が正しいならば、私が初めに説得しなければならないのは私の仲間である経済学者たちであって、一般大衆ではない。」

(Keynes [2013VII] p.xv 訳 xxv-xxvi 頁)

そして、現在の経済学者がこのケインズの指摘に耳を貸すことはもちろん重要である。教科書としての体系書に対して、経済学の発展を期す場合には、時代の社会的課題に対応するパンフレットの公表が求められるということであろう。

さらに、ジェヴォンズとマーシャルの両者が有した経済学者が持つべき特徴も挙げておくべ

9) 〈 〉はイタリック。筆者挿入。

きかもしれない。この論文ではさらに展開することはできないために、今後の課題であるが、経済学者のあるべき資質としてケインズはその多面性を指摘している。

「経済学の研究には、なんらかの人並外れて高次の専門的資質が必要とされるようにはみえない。…哲学や純粋科学などのもっと高級な部門に比較すると、はなはだ平易な学科ではあるまいか。それなのにすぐれた経済学者、いな有能な経済学者ですらも、類いまれな存在である。平易で、しかもこれにぬきんでたひとのきわめて乏しい学科！こういうパドックスの説明はおそらく、経済学の大家はもろもろの資質のまれなる組み合わせを所持していなければならないということのうちに見いだされるであろう。そういう人はいくつかの違った方面で高い水準に達しており、さらにはいっしょに見られないような才能をかね具えていなければならない。彼はある程度まで数学者で、歴史家で、政治家で、哲学者でもなければならない。」

(Keynes [2013X] p.173 訳 136 頁)

現代においても必要とされるマルチな能力の必要性が、すでにケインズによってこの時代に指摘されていたということになる。

最後に、本論文は佐藤周先生の退職に際して、筆者の専門とする経済学史・経済思想史という面から、論を掘り起こそうとした。筆者の能力の限界から、佐藤周先生の専門との関連で本論文の内容に落ちてくことになってしまった。ご容赦いただきたいと存じます。

参考文献

- 阿部 [1998]：阿部秀二郎「ジェヴォンズの生産理論」『研究年報 経済学』（東北大学経済学会，211 号，27-45 頁）
- 阿部 [2016]：阿部秀二郎「第 10 章 ジェヴォンズによるミル論理学批判と経済学」『経済学の座標軸』（仙台経済学研究会編，社会評論社，175-191 頁）
- 井上 [1987]：井上琢智『ジェヴォンズの思想と経済学』（日本評論社）
- 大久保 [2013]：大久保正健「第 7 章 ジョン・スチュアート・ミルと直観主義形而上学」『ヴィクトリア時代の思潮と J.S. ミル』（有江大介編著，三和書籍，137-162 頁）
- 西沢 [2008]：西沢保「マーシャルにおける経済学と倫理」『経済研究』（一橋大学，59-1，46-58 頁）
- 松山 [2010]：松山直樹「マーシャルの初期心理学研究と経済学における人間研究の意義」『経済学研究』（北海道大学大学院経済学研究科，59-4，59-76 頁）
- Fisher [1922]：Fisher, I., *The Making of index numbers; a study of their varieties, tests, and reliability*, Boston
- Keynes [1951]：Keynes, J. M., *Essays in Biography*, new edition with three additional essays, ed., by Geoffrey Keynes and Rupert Hart-Davis, Cambridge, 熊谷尚夫・大野忠男訳『ケインズ 人物評伝』（岩波書店，1992 年）

- Keynes [2013VII] : Keynes, J. M., *The General Theory of Employment, Interest and Money*, *THE COLLECTED WRITINGS of JOHN MAYNARD KEYNES VII*, Cambridge. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』（『ケインズ全集 第7巻』, 岩波書店, 1993年）
- Keynes [2013VIII] : Keynes, J. M., *A Treatise on Probability*, *THE COLLECTED WRITINGS of JOHN MAYNARD KEYNES VIII*, Cambridge
- Keynes [2013X] : Keynes, J. M., *Essays in Biography*, *THE COLLECTED WRITINGS of JOHN MAYNARD KEYNES X*, Cambridge
- Keynes [2013XI] : Keynes, J. M., *Economic Articles and Correspondence: Academic*, *THE COLLECTED WRITINGS of JOHN MAYNARD KEYNES XI*, Cambridge
- Kraus [2001] : Kraus, H., Böhm-Bawerk, Jevons and 'Austrian' theory of capital: 'a quite different relation', *The European Journal of the History of Economic Thought*, 8:1, pp.42-57, Routledge
- Maas [2005] : Maas, H., *William Stanley Jevons and the Making of Modern Economics*, Cambridge
- Peart [1996] : Peart, S., *The Economics of W. S. Jevons*, Routledge
- Robbins [1936] : Robbins, L., The place of Jevons in the history of economic thought, *Manchester School of Economics and Social Studies*, 7, pp.1-17; reprinted Wood 1988, Vol.1, pp.94-108
- Winch [2013] : Winch, D., Introduction to New Edition, *Essays in Biography*, *THE COLLECTED WRITINGS of JOHN MAYNARD KEYNES X*, Cambridge

Keynes' Discussion of Mill, Jevons and Marshall, and the Role of Economists

Shujiro ABE

Abstract

This paper considers the views held by John Maynard Keynes about the role of economists in light of his writings in *The General Theory*. It is possible, indeed, to explore the proposition of a relation between the principal arguments and thesis in Keynes' writings and his convictions about the history of economic thought. It may be argued that Keynes made attempts to provide perspectives from the theory of the Ricardian Economics, including Mill and Marshall, among others. The General theory may be also viewed as a treatise reflective of the intellectual dispute with the orthodox school, which argues for the inherent ability of the economic system to adjust itself without external influence. In contrast, Jevons' *Theory of Political Economy* constitutes a monographic contribution to deductive economics constructed on abstract assumptions. As a non-conformist, Jevons' theoretical insights and arguments against the orthodoxy and Keynes regards his brief pamphlet as making much progress and marking a new stage in economic science.